

全員が楽しめる結婚式

～目が見えるひとと目が見えないひと 同じ空間で～

▶ アヴェニールクラス東京（運営：エスクリ） 藪田 宏美



「GOOD WEDDING AWARD 2017」ではソウル賞に輝く

点字習得など“見えない”感覚をインプット
ゲストの反応や雰囲気を感じてもらう打合せのたびに
メッセージカードを点字で用意

「全員が楽しめる結婚式」

これは、アヴェニールクラス東京（東京都豊島区）の藪田宏美さんが、視覚障がいのある新郎新婦から受けたリクエストだ。その瞬間、藪田さんには「健常者と障がい者が同じように楽しめるプランニングは可能だろうか？」という不安がよぎった。

一般的な結婚式でも、親戚や勤め先の上司、学生時代の友人など、普段は接点がなく、新郎新婦との関係性も異なるゲストが一堂に会する中、全員が同じ感覚で楽しめるようなプランニングは簡単ではない。

まして、このお客様は、新郎新婦の二人と、ゲスト14名が視覚障がいを持つという事情があり、難易度は相当に高く感じられた。

だが、迎えた結婚式当日、視覚障がい者のゲストから飛び出したのは「魔

法の国にいるみたい！」という感想。新郎新婦からリクエストを受けた「全員が楽しめる結婚式」は成功の裡に収めることができたと言える。

プランニングを進める上で、まず、藪田さんが取り組んだのは、視覚障がいを持つ人の感覚をインストールすること。

担当が決まると、インターネットで「点字キット」を購入、名刺には点字で名前を打ち込んだり、打合せのたびにサロンに置いているメッセージカードも点字で用意したりした。

これは「二人のことを知りたい」という気持ちの表現につながり、新郎新婦の側でも藪田さんに強い信頼を寄せるきっかけとなった。

指で確認できる
会場レイアウト図を手作り

打合せが始まると、藪田さんは「二人がいつ頃から視覚を失ったのか」

「買い物に行く時はどうしている？」など、視覚障がいの状況を把握するために、様々な質問を投げかけていく。「障がい」というデリケートな部分に踏み込むことは、「失礼にあたるのではないか」といった不安もあったが、

アヴェニールクラス東京
チーフウェディングプランナー 藪田 宏美

ホテルでウェディングプランナーとしての経験を6年半積んだ後、株式会社エスクリに入社。東京都豊島区のアヴェニールクラス東京・アルマリアン東京の立ち上げメンバーとして入り現在は同会場のチーフとして勤める。これまでウェディングプランナーとして担当したお客様は500組以上。

イラストを描くのが好きで、打合せの時には、いつもメッセージカードを席に置いています。お客様にとって、準備期間も結婚式と同じくらい楽しい大切な時間になるよう努めています！

二人にも「お二人のことを理解した上で、最高の結婚式を創りたい」と熱意を伝え、協力してもらった。

プランニングの大きなヒントになったのは、二人が結婚式への参列経験で受けたイメージや感想。

二人が明るい口調で話してくれた「結婚式“あるある”」は、藪田さんにとって「そんな状態で参列しても楽しめるはずない！」と愕然とする内容だった。そこで、プランニングの“軸”にしたのは、視覚障がい者が経験する「結婚式“あるある”」を極力、なくすこと。どんな“あるある”を解消したのか、3つ程度紹介してみたい。

①「自分の席と新郎新婦の位置関係が分からない。そもそも新郎新婦がどこにいるのかも分からない」

まずは、二人に一般的な結婚式のレイアウトを伝えるべく、A4サイズの紙を会場に見立て、上座に厚紙で作った高砂席を貼り付け、ゲストテーブルは丸いシールを貼って表現した。目の見えない二人にも、指で触れて認識してもらえる。

視覚障がいのあるゲストも同様の経験をしてきたはずだが、この結婚式では「そんな思いをさせたくない」と考え、席次表もシールなどを駆使して作

◆BGM当てクイズ

一目の見えないゲストも全員でワクワク

ゲストは受付時に3曲のうち好きな曲を投票。どの曲が選ばれるかは、お色直しまでのお楽しみ。再入場シーンでは、聴こえてきたBGMにも歓声が



成。指で触れて全体のレイアウトや自分の席、新郎新婦との距離などが分かるようにした。また、点字のドリンクメニューを用意し、好きなタイミングで注文できるよう、細心の配慮を配った。

プロフィールムービーで
ゲストの反応を体感させる

②「キャンドルサービスのシーンでめちこちから歓声上がるけど、なぜそんなに盛り上がっているのかわからない」

演出などのシーンが繰り返されていても、視覚障がい者には伝わっていないことが多い。藪田さんは、視覚以

外で楽しめる演出や、目が見えなくても状況をイメージしてもらえる工夫を、新郎新婦と一緒に考え出していく。

例えば、プロフィールムービー。目の見えないゲストにもどんな映像が流れているか伝わるように「写真に付いている説明文をナレーションしましょう」と二人に提案すると、「ナレーションを入れるなら藪田さんをお願いしたい」とのこと。映像制作のパートナー企業と協力して、藪田さんのナレーション入りムービーが仕上がった。

予定では、お色直しの中座中に上映することになっていたが「お二人には、映像を見ているゲストの反応やその場の空気感を記憶にとどめてほしい」という思いが湧き起こり、サプライズで再入場後に流すことにした。

このムービーの上映は、思いがけず、会場を温かい雰囲気であふらせた。例えば、若い新婦が飾りの前に座る写真について「お雛様と私、どっちがかわいい？」というナレーションが流れると、「ゆうこちゃん（新婦）の方がかわいい！」といった歓声上がるなど、ゲスト全員が二人の半生を共に振り返りながら、それぞれの思いを表現し合う時間になったという。

「私も涙をこらえきれなくなるほど、温かいシーンでした。新郎新婦のお二人も、これまでにいかに多くの愛情を受

◆プロフィールムービー

—ゲストの反応を二人の記憶に刻んでほしい—

中座中に上映予定だったプロフィールムービーは、サプライズで再入場後に。映像を見ているゲストの反応や空気感を二人の記憶にとどめてほしいという藪田さんの配慮



けて育ってきたか、愛情に満ちた人々に囲まれているか、幸せをかみしめてもらえる時間になったと思っています」

「お色直し再入場BGMのゲスト投票」も、会場全体を盛り上げた演出の1つ。これは、新郎新婦と藪田さんの会話から生まれたアイデアだ。

明るく楽しいパーティーを希望する二人は、とにかく盛り上がる演出を取り入れたいとのこと。ドレスの色当てクイズなどは定番だが、目の見えないゲストも全員で盛り上がるアイデアはないかとディスカッションした。

様々なアイデアが上がる中、最終的に選んだのは、再入場BGMのゲスト投票。ゲストには受付時に、3曲の中から好きな曲に投票してもらい、多数決で決める。どの曲になるか、ゲストも新郎新婦もスタッフも、全員ワクワクしてお色直しの瞬間に臨むことができるのだ。

当日の再入場シーンは、新婦のスタイルチェンジに対してだけでなく、聴こえてきたBGMにも歓声上がり、障

がい者・健常者の違いを超えて一体感が生まれた瞬間になった。

キャプテンやアシスタントからも様々なアイデア

③「サービススタッフに「何かあれば手を挙げてお申しつけください」と言われても、何が行われているのかわからない状況で手を挙げるのは勇気がいる」

この“あるある”の解消については、サービススタッフと司会者が、機転を利かせてくれた。

サービススタッフは、名札の辺りに鈴をつけてくれ、目の見えないゲストが、鈴の音でスタッフとの距離感を測れるようにし、近くにいる時に呼び止められるようにした。

司会者は、目の見えないゲストにも、パーティー中、どこで何が起きているかを知らせる工夫を模索。パーティーの冒頭、マイクなしで会場の正面に立ち「今日はこの場所を“0時の場所”とします。“10時の場所”というと扉

口を示します」などとアナウンスし、全員が状況をイメージできるように配慮してくれた。

藪田さんはこの結婚式を通して、メンバーを巻き込むこと、チーム力の大切さを改めて学んだという。

挙式の入退場シーンは象徴的なエピソードの1つだ。

目の見えない新郎新婦が、当日と同じ衣装を身に付けて予行練習できるよう、リハーサルを行った時のこと。新郎1人で入場する分にはスムーズにいくのだが、問題は退場時。新婦と腕を組み、さらに新婦の傍らには盲導犬もいるという状況で新郎のバランス感覚は崩れ、どうしても左に傾いてしまう。「まっすぐ歩こう」と真剣になるあまり、二人の表情は硬い。

するとリハーサルに同席していたサービスキャプテンやアシスタントから様々なアイデアが湧き上がり、当日は、ゲストの手を借り、新郎とハイタッチしながら退場するスタイルを採用することにした。二人が笑顔でバージンロードを歩めただけでなく、ゲストとの一体感も生まれた。

二人の挙式リハーサルに同席したメンバーは、その後も新郎新婦や視覚障がいのあるゲストの視点に立って、様々なアイデアを出してくれるようになった。

例えば「ドリンクの位置を分かりやすくするために、コースターを5枚重ねて厚みを出しましょう」「トイレの案内板も点字を取り入れてみては？」といった具合だ。

「私はこれまで、良い結婚式には「新郎新婦×プランナー」という方程式が不可欠だと肝に銘じてきました。三者が強い信頼関係を築くことで、結婚式のアイデアも3倍に広がり、表現の幅も広がるという意味です。しかし、今回、他のメンバーを巻き込むことで、アイデアや表現の幅は何倍にも膨らむこ

とを確信しました。プランナーには、周りから強力なサポートを得られる資質も必要で、日頃、スタッフとどんな関わり方をするかというのも、重要な仕事の1つだと感じています」

手づくりの会場図面やドレスの型抜きなどが並ぶ「結婚式資料館」

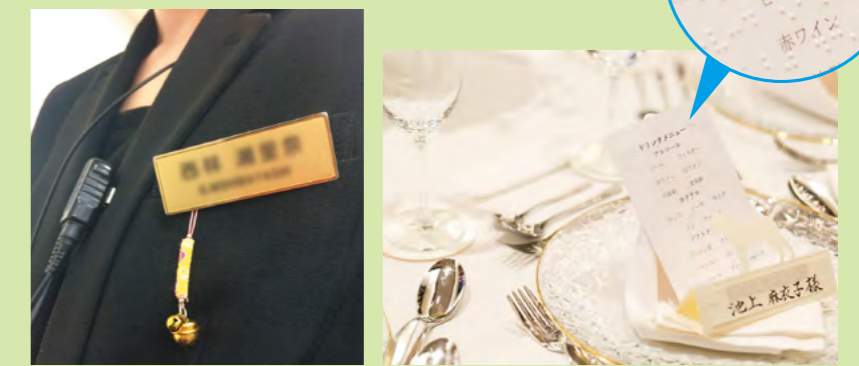
この結婚式は、ブライダル総研「GOOD WEDDING AWARD」でソウル賞に輝き、世の中に広く知られるところとなった。

藪田さんが、エントリーを決めたのは「この結婚式をもっと広めたい」という新郎新婦の願いをサポートしたいという思いもあった。

「私は約10年、ウェディングプランナーを務めています。視覚障がいのあるお客様を担当したのは初めてです。これはあまりにも少ない数で、「障がいのある方は結婚式を諦めてしまっているのではないかと強い問題意識を抱きました。「障がいのある人も、等しく素敵な結婚式を挙げたい」、お客様と私、3人の思いも

◆視覚障がい者の“結婚式あるある”を極力カットーサービススタッフからもアイデア続々

点字のドリンクメニューを作る、サービススタッフは鈴を身に付け居場所を知らせる、コースターを5枚重ねてドリンクの位置を分かりやすく、など随所に工夫を散りばめる



発信することができたのではないかと考えています」

も知ってほしい」という思いも込められている。

結婚式当日、パーティー会場の受付周りには「結婚式資料館」というコーナーが設けられた。結婚式の準備を通して「この結婚式をもっと広めたい」と考えるようになった新郎新婦の「目が見えず、結婚式も“見たことがない”私達がいかにして素敵な結婚式を挙げられたか、同じ障がいを持つゲストに

「結婚式資料館」には、指で触れて確認できる厚紙で作った会場レイアウト図、衣装選びのサポートとして藪田さんが考え、手作りしたドレスラインの型抜きなど、二人に結婚式を具体的にイメージしてもらうために用意したアイテムの数々が並んだ。まさに、新郎新婦と藪田さんが歩んだ打合せ期間の軌跡ともいえるコーナーとなった。

◆コミュニケーションツール 一点字や手づくりで二人との距離近く

担当が決まると、即、点字キットを購入し、打合せのために用意するメッセージカードも点字で。会場図面やドレスカタログは指で触って識別できるよう手づくりも

